

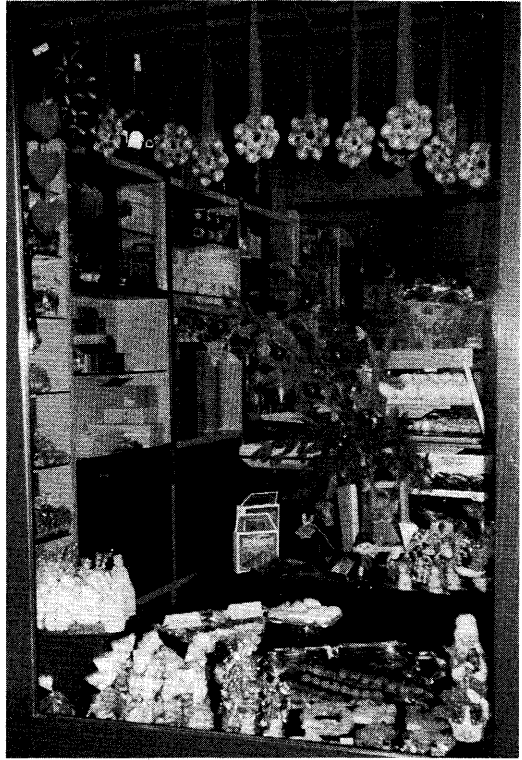
## 西ドイツのクリスマス

美谷島いく子

西ドイツの大学街マールブルクにも、十一月十一日の聖マルティン祭が終わると日毎に空の暗さが増し、根雪が降る。ライン河が凍り始め、寒い日が続くと全面結氷する。子ども達は、雪合戦、橇や氷滑りに興ずる。寒さが緩み川霧が出ると、翌朝は美しい樹氷が見られる。霧深く、雪と氷に閉ざされ、太陽の光の少ないこの季節は、社交シーズンの到来でもある。パーティや観劇の席で、最大の年中行事であるクリスマスのことが話題になり始め、人々はその準備に忙しくなる。

古い商店街オーバー・シュタットには、星とS字型の

イルミネーションがアーチ状に付けられ、毛皮に身を包んだ買物客で賑う。老舗にはキリスト誕生の人形が飾られ、雪の舞う石畳の道辻には樅の木や寄生木ミステル売りの声が響く。お菓子屋には、パイプをくわえたヴァイナハトマンの菓子パン、チョコレートやクッキーでできた御菓子の家、聖ニコラウス、雪達磨、天使や豚のマーチパン、樅に吊す花や星型のレープクーヘン（蜂蜜入りクッキー・写真①）が並ぶ。十一月末には、市庁舎、エリザベート教会の前に、大きな樅の木が立てられた。家々の軒には、寄生木がほんほりのように丸く束ねて吊され、庭や窓辺も



①御菓子屋の店先

それぞれの趣向で飾られ、外出の際の楽しみだった。

(1)アドヴェント(待降節・降臨節)

降臨節<sup>ヴァイナハト</sup>だけを祝うのではなく、四回前の日曜日から降臨節までの間、準備をしながらクリスマスの降臨を静かに待ち臨む期間である。待降節の第一日曜に戸外の樅の木に灯が燈される。この期間に緑の小枝で輪を作り、アド

形のチョコレートが入っている。

伝統的な御菓子ヴァイナハトシュトレンやレープク

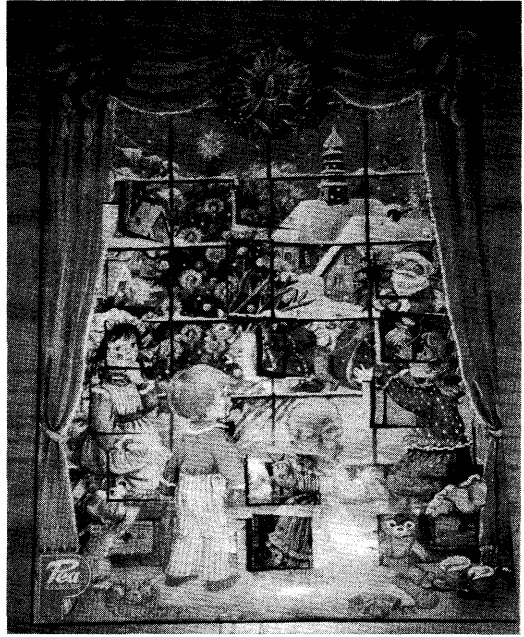
ヘン作りには、可愛い娘の手も加わってくれた。幼子イエスのくるまった毛布の形に焼きあがった熱々のシュトレンを天火から出すと、今年もこれでやっと降臨節を迎えられると、ほっとしながら仕上げの粉砂糖を飾<sup>ま</sup>う。

家族や友達がアドヴェントクランツの回りに集まり、

ヴェントクランツと言って四本の蠟燭を立てる。最初の日曜に一本火を燈し、次の日曜に二本目にも火を付け、四本すべてに火が燈されると、次には待ちに待った降臨節がくる。

この間、娘にとって朝一番の楽しみは、ベット際の壁に飾ったアドヴェント・カレンダー(写真②)である。

クリスマスに因んだ絵に一から二十四の数字が書かれ、扉になっている。毎日一つずつ開けると、様々の



②アドヴェント・カレンダー

楽しく幸福な時間である。降誕節当日まで何日も待って／＼過ごすことにより、聖ニコラウスをはじめとする様々の夢想は、豊かに広がり、巡り、賑らんで、確かなものになってゆくのであるから。

(2)ヴァイナハト・マルクト

子どもの大好きな露店市、ヴァイナハト・マルクトが開かれるのも、アドヴェント中である。十二月一日から二十二日まで、エリザベート教会の境内はテントの露店で賑う。切りたての樅の木、

蠟燭の上昇するように垂直にゆらめく焰を見つめ、この一年間のことに思いを巡らしゆったりとした時間を過ごす。胡桃割り人形で胡桃を割って食べたり、パイプ人形で香と煙を楽しんだり、ヴァイナハト・ピラミッドの光と影を堪能するのもこの時である。蠟燭の焰を見つめて、何年も昔々の最初の降誕節に思いを馳せながらその日を静かに待ちわびるアドヴェントは、子どもにとって

ツリーの飾り（鉛、錫、麦わら、木製、胡桃割り人形、パイプ人形、色鮮やかな蠟燭、人形の家の調度品、手作りのクリスマスカード、茶や青系の陶器マールブルク焼、クッキーやケーキ型等々のクリスマス用品が並ぶ。ここで売られている商品は、日本の縁目のもののようにその日限りの果敢ないものでなく、クリスマス毎に長い年月使い続けることができる品が多い。その為か実質的

で堅固な代わりに高価である。

子ども達は食べ物店の方に群がっている。ハート形のレープクーヘン、小熊のぐみ、マシュマロの白鼠や赤い砂糖菓子、馬蹄型、豚や魚のマーチパン、チョコバナナ、甘栗にポップコーン、綿飴や棒のキャンディ。厳しい寒さの中なので、焼きたての蜂蜜たっぶりのクレープや、熱々のブルストをはさんだブロートヒェンと、紙コップ入りの熱いスープやホットワインを片手に歩き廻る人が多い。一隅には天井にメルヒェンの絵が描かれた回転木馬がすえられ、吹雪の中、子どもを乗せて回っていた。

玩具の産地であるニュールンベルクのヴァイナハト・マルクト(写真③)は、大規模で有名である。ルードイッヒ・リヒターは、二人の幼い子が人形を売っているドレスデンのヴァイナハト・マルクトの絵(絵④)を残している。(二八五三年)

③ニュールンベルクのヴァイナハト・マルクト



二十三日、前を通ると、すべての露店は跡形もなく消え去り、昨日までの賑いが嘘のようだった。十三世紀建立という教会の二本の尖塔が寒空に聳え立ち、そこに吊された鐘が、聖なる時の訪れを祝福するかのようになり、人気がない庭に清しく鳴り響いていた。

### (3) 聖ニコラウスとルブレヒト

十二月五日の夜は、聖ニコラウスが下男のルブレヒトを連れ、玄関の戸を叩く。僧侶姿の聖ニコラウスと粗末な格好で贈物の袋と鞭を持ったルブレヒトは、家に入り、子どもにこの一年良い子だったか悪戯をしなかった



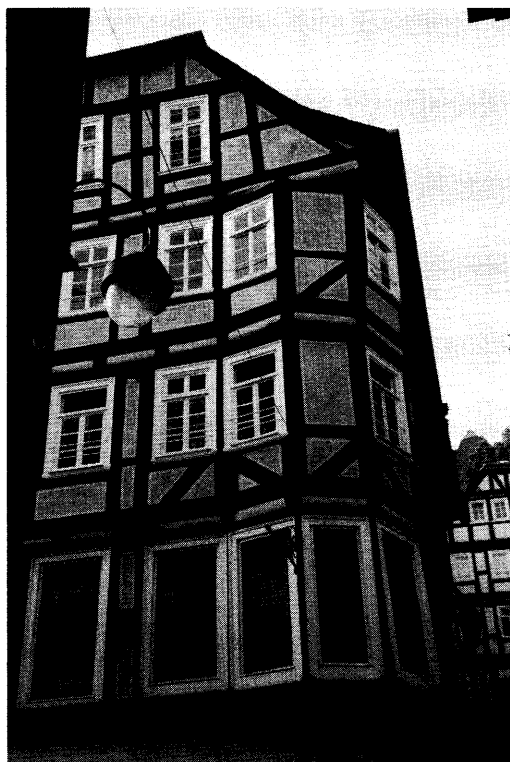
④ドレスデンのヴァイナハト・マルクト  
(1853年) Ludwig Richter 絵

かをたすね、闇魔帳に記入する。悪い子には鞭を、良い子には贈物を与え、もうすぐやってくる降誕節を祝う。場所によって克蘭プスという鬼を連れてくる所もある。一年の終りに子どもを罪を悔い改めさせるこの行事は、男鹿半島の生剥なまはくに似る。

(4)アドヴェントに生まれた子どもの本  
人々は、アドヴェントの期間に、愛する人への贈物を何にしようかと考えを巡らせる。ドイツでは、世界の子どもに親しまれ続けることになった二冊の本が、アドヴェントの期間に生まれたことを忘れることができない。

### 『子どもと家庭の童話』

百八十七年昔、市庁舎の近く、パール・ヒューサー通りにグリム兄弟が、マールブルク大の法科の学生として下宿(写真⑤)していた。グリムは、ザヴィーニ教授の



⑤グリム兄弟の下宿

とその長男に捧げた。黄金に縁取りされ常磐木の緑色の装丁のグリム童話を、世界の誰よりも先に、ヴァイナハトの朝、手にすることができたベッティーナの心は、どんなにか弾んだであらう。彼女縁ゆかりの地がベッティーナ・トウルムとして苔生している。

紙も印刷も粗末で、挿絵もない地味な本であったが、私達が親しんできた「蕁の王様」「狼と七匹の子山羊」「赤頭巾」「ヘンゼルとグレーテル」「灰か

もとで後期浪漫派の人との交りの中、グリム童話の種を育み始めていた。グリム童話の原形は、エーレンベルク原稿に先駆けてザヴィーニの子どもに送った手紙に遡るといふ。ザヴィーニの家も、エングガッセを登った所に残っている。大学入学から十年後の一八二二年のアド

ヴェントに、ベルリンのライマー書店から『子どもと家庭の童話』を刊行し、ベッティーナ・フォン・アルニム

ぶり」「白雪姫」「いばら姫」等の話は、この初版に収められている。当時ドイツはナポレオンの支配下で厳しい状態だったが、アドヴェントの豊饒な時間から、聖書に次いで世界中の子どもに読まれることになったグリム童話は、産声をあげた。

『もじゃもじゃペーター』

一八四四年のヴァイナハトの一週間前に、フランクフ

ルトの医者、ハインリッヒ・ホフマンは、三歳半の長男の贈物に、絵本を買いに街へ出た。しかし、気に入った絵本が見つからない。仕方なく、一冊のノートを買って帰り、自分で絵を描き、詩をそえて一冊の絵本を作った。それが『もじゃもじゃペーター』である。私は、もじゃもじゃペーター博物館やグーテンベルグ博物館で、ホフマンの古い版のこの絵本を見ることができた。蠟燭とガラス球とクッキーの飾られた二本のツリー、絵本を持つ天使、玩具で遊んでいる男児等をつないでいる、素朴で稚拙とも言える唐草模様のかすれたインクからは、ヴァイナハトを前にして、息子の為にペンを急がせているホフマンの、優しい息使いが聞こえてくる。この絵は、その時即座に生まれたのではなく、彼が診察の折に、泣き騒ぐ子どもに描いてやった「腕白フリード」「可哀相なパウリちゃん」「スूपズぎらいのカスパル」「指なめ小僧」「行儀の悪いフィリップ」「もじゃもじゃペーター」等の描き慣れたものだった。しかし、これらの断片的な絵が一冊の絵本として結晶したのは、アド



ヴェントの豊饒な時間の成せる業に違いない。翌、一八四五年のヴァイナハトに、初版千五百部が出版された。



⑥メルヒェンを語るグリム家の乳母Ewig  
1829年 降誕節  
Ludwig Emiel Grimm 絵

降誕節は、家族だけで静かに過ごす。屋内のツリーは、二十四日に子どもがいらない所で飾り、鈴の合図で子どもを部屋に入れて初めて見せる(絵⑥)。この時の贈物は、幼子イエスからという。エンテの食卓を囲んだ後、家族で教会の夜のミサに行った。帰りには雪が舞い

始めた。四百五十年前には修道院だったアルテ・ユニの坂には、何本もの蠟燭が立ち、灯が燈っていた。  
大晦日は、親類、友人が集り賑やかに過ごす。豚が古語では次の月を呼び、幸福を運んでくるので、豚のマーチパンを食べたり、豚の置き物を飾る。夜中の十二時と同時に教会の鐘が鳴り響き、家々では花火を打ち上げ、新年の訪れを祝う。花火は古い悪霊を追い出す意味がある。山城の周りに上がる花火が、垂れ柳のように美しかった。

(5) 燠いぶ十二夜

十二月二十五日降誕節から一月六日公頭節ヘビツクニヤまでを燠十二夜という。この時期は冬至の頃に当たり、太陽の光を見ることが少ない。自然が猛威をふるい、大雪や嵐に襲われることが多い。ゲルマンの伝承によれば、



十二夜の間、風神ヴォータンが白馬に跨り天空を駆け巡り、その親族ペルヒタ、ホレ、エツカルト、コーボルトもそれに続き、先祖の霊や悪霊もあたりを跳梁しているという。この禍禍しい中で、人々は不安に戦<sup>おの</sup>き、太陽の再生、春の再来を待ち望んで焚火をしたり、蓬や葉草を燻して、災や悪霊を追い放つたことから燻十二夜と呼ばれる。人々は、子どもによって行われる「三博士の門付け」を、春の訪れを告げる最初のものとして待ちわびている。

友人から聞いたところによると、ドナウ河畔の古都レーゲンスブルクでは、三博士の門付けが行われている。一月六日に、三博士（又は星の歌い手）が、家々を回る。三人の少年が、東方風のカスパール、メルキオール、バルタザールに変装する。カスパールは顔を真黒に塗る。手には各々、乳香、没薬、黄金を携える。三博士は、棒の先に付けた星を運ぶ一人の少年を先頭に立たせ、二、三人のお供がいる。三博士の一行は家々を回り、ツリーの前で、飼葉桶の中のイエスの為に伝統的な

歌を歌う。三博士の一人は、乳香の炉を携えているので香が漂う。彼等は去る前に、入口の梁上<sup>は</sup>に三博士の頭文字と年号（C.M.H.B. 1989）を書く。節分の十二書のように、家に災や悪霊が入らない為に。子どもは、御礼にクッキーやお金を貰い、歌を歌ってから雪道を進んでゆく。

ツリーやキリスト生誕の人形は、この一月六日に片付けられる。飾りを取り去ったツリーは、庭に出され、厳しい寒さと大雪の中でも小鳥が餓死しないように、四十二雀のとまる為の輪や、餌袋を吊して、再び雪の中に立てられる。

（松本市在住）